

JK・アニコチェ パブリック・トーク

「Touch Play」

開催日時：2016年10月27日（木）19：00-20：30

開催場所：森下スタジオ

滞在のリサーチ・テーマ、「Touch Play」について

まずは、今回の滞在に関する企画内容をお話し、リサーチの意図をご説明したいと思います。タイトルは「Touch Play」で、野口整体の実践と、共有参加型パフォーマンスにおける親密さの多様性をリサーチしました。その背景として、21世紀の演劇は、そのルーツへと方向を転換してきたと考えています。それは、共有される体験としてのパフォーマンスであり、コミュニティに關与するパフォーマンス、あるいは直感的、直接的な関わりを持つパフォーマンス、そして共有される時間と空間における存在とエネルギーの計り知れない交換の場としてのパフォーマンスです。その文脈では、パフォーマーと観客との境界線は曖昧になり、パフォーマンスにおける権力もパフォーマーから観客に分散されています。言い換えると、創作者が参加者になり、参加者が共同創作者になっているという状況です。それは、共有される儀式としてのパフォーマンス、コミュニケーションとしてのパフォーマンス、そして、共に行動し、考え、感じ、そして共存するというパフォーマンスです。

この10年でアジアに限らず、世界各地でこういった参加型で没入型、そしてインタラクティブな演劇が発展してきていますが、アーティストが自分を取り巻く周囲の環境、そして、世界に手を伸ばし、それらを理解し、繋がりたいという欲望の表出だとも言えると思います。そのバーチャルな仮想世界における相互接続が進化する中で、私たちは社会の多元的な視点や理解の地図を描き、解読し、体験し、明確に表現しようとすればするほど、身体的で、直感的で、地に足の着いた繋がりや交流、コミュニケーションを必要とします。それはつまり、21世紀のデジタルな身体と物理的な身体がアイデンティティと関わり、いかに共に存在するのかということを重要な緊急課題としています。

パフォーマンスは共同体の創造、つまりイマジネーションのリハーサルとして行われ、それがいつか共同体の行為として翻訳されることが期待されています。その場合、パフォーマンスは今、現在という同時代性の感覚や感受性をマッピングし、それを象徴化して表すものです。私は「Touch Play」を、共有される儀式や交換としてのインタラクティブなパフォーマンスを掘り下げ、問い直すための継続的な調査として行っています。触れること、親密さを持つこと、同意すること、プライベートな身体と公共の身体といったことの境界線や、労働として接すること、ヒーローとしてのアーティスト、身体から生じる物語、あるいは身体の中の物語といったことに関して、問いかけて向き合うものです。ファシリテーターとしてのアーティストは触れることが許されるパフォーマティブな行為のトレーニングを行います。それは例えば、資格のあるマッサージから官能的なマッサージ、野口整体による癒しなど、多様な方法が考えられます。そのようにして触れることに関する異なる言語を学ぶことによって、次のようなパフォーマンスを作ることができると考えています。まず第一に身体が物語る歴史をアーティストが読み解いて現在の身体を癒し、未来のために整えるパフォーマンス。第二に、そのプライベートな行為を公共の場で演じて、その行為を見れる空間を作るパフォーマンス。第三に、パフォーマンスのインタラクションにおいて、何が許されて何が許されないのかという概念に挑戦するパフォーマンス。最後に、サービスとしてのパフォーマンスの価値を問いただすパフォーマンスです。

「Touch Play」カード

これが「Touch Play」のカードです。このカードは秋葉原のメイドカフェのメニューや、添い寝カフェのマッサージのサービスからインスピレーションを受けました。パフォーマンスの途中で渡しますが、このカードがプレゼントやギフトとなっています。例えば、植物に水をやる、一緒に物語を読む、髪を梳くといった内容が記されています。また、英語では「現在」という意味もあれば「ギフト」という意味もある「プレゼント(present)」という言葉について、「現在」ということがギフトになる、ということ在意図しています。この数日間、様々な背景を持った整体師をの方にお話を伺いましたが、人々の精神と身

体の問題は繋がっているというように、整体師の方が考える「プレゼント」の世界観は禅仏教の影響を受けていて、とても興味深く感じました。

「Touch Play」の今後の展開

皆さんはまだ「Touch Play」がどういうものだろうかと疑問に思っているかもしれませんが、現在行っている「Touch Play」のリサーチは、『ラブ・サービス・プロジェクト(Love Service Project)』というプロジェクトの日本版を作るための調査でもあります。これは、マニラのコンテンポラリー・コミュニティー・パフォーマンスカンパニーである「シパット・ラウイン・アンサンブル」が、2017年のプロジェクトとしてキュレーションし、ペピン結構設計の石神夏希さんをはじめとする日本人のアーティストとのコラボレーションとして行う予定のプロジェクトです。『ラブ・サービス・プロジェクト』というのは2013年の8月にマニラで発表した『ラブ、これはまだミュージカルではない(Love, this is not yet the musical)』というプロジェクトから出発しました。これはクラウド・ファンディングを通して300人以上の寄付者を獲得し、更に愛に関する言葉やアイデアを500件以上寄付していただくことで成り立った、これまででも最大規模のインタラクティブなパフォーマンスでした。このプロジェクトの目的は、世代による愛についての考えや感情を記録することで、ありふれたつまらないもの、あるいは精神的・宗教的なもの、ピュなもの、政治的なもの、といったあらゆる種類の愛を、あらゆるメディアを通して記録するというものです。具体的にはTwitterでシェアをしたり、Facebookやウェブでステータスや言葉をアップしたり、オンラインでのグラフィティや詩の朗読、ダンスなど、様々なメディアを用いた記録を行いました。

これが『ラブ、これはまだミュージカルではない』の映像です。まず、最初にプールで、その次に古い印刷場でパフォーマンスを行いました。このパフォーマンスの中では結婚式も行われました。フィリピンはカトリックの国なのでLGBTの人たちは結婚できないということになっていますが、ここではオンラインで神父としてのライセンスを取り、パフォーマンスの中で結婚式を挙げました。この『ラブ・プロジェクト(Love Project)』の最新の形は、2017年の2月に『ラブ・サービスプロジェクト』としてオーストラリアのメルボルンで開催されるAsia TOPA(アジア・パシフィック・トリエンナーレ・パフォーマンス・アーツ・イン・アジア)の中で発表します。日本からはコラボレーションのアーティストの一人として石神夏希さんも参加します。

愛情を提供するサービスをテーマとしたプロジェクト

次は『SERBISYO』というプロジェクトです。このプロジェクトは感情あるいは愛情の労働とサービス産業に関するデバイス・パフォーマンスの商品を集めてキュレーションし、異なるアーティストによって作られた商品の全てにおいて、社会の隠れた層に存在する様々なサービスのアイデンティティを照らし出すものです。ここではアーティストがホスト役となり、アートはパフォーマンス的な労働となります。また、このプロジェクトの中では、観客をアートセンターの外という公共の場から、劇場の中、その舞台裏、そしてその下に埋もれる部屋や廊下という隠された場に引き込んで、目に見えない経済というものを露わにしていきます。

『SERBISYO』というのが商品のコレクションだと述べましたが、その中の商品の一つの紹介したいと思います。これは『Yenyen』というもので、『Yenyen de Sarapan』、つまり、あらゆる場合のためのインディペンデント・マスコットということで、このマスコットは人々の声を仲介します。不満や不平といった苦情から隠れたトラウマであったり、政治的な抗議から称賛、秘密の愛の告白など、『Yenyen de Sarapan』は増幅し、肯定し、言動の自由を祝う、というもので、『Yenyen de Sarapan』は人々のマスコット、雇われた人々のマスコットとなるわけです。

新作の構想

「Touch Play」の次のステージとして考えているものの一つに、『アジアのタッチ、マッサージパーラー(A Touch of Asia, Massage Parlor)』という作品があります。この作品は、一人のアーティストが集団マッサージを行う8時間のソロのパフォーマンスで、アーティストはサービスを提供するマッサージ師という立場に置かれ、観客は見るか、参加するかどちらかを選ぶことができます。これは「Touch Play」

になる以前の段階にマニラで行ったプロトタイプの写真で、一対一で身体的なマッサージを行うというものでした。

先程の『SERBISYO』というコレクションの中のもう一つの商品として、秋葉原でのリサーチに基づいた『彼女の体験 (Girlfriend experience) 』というものがあります。これは、例えばレンタル彼氏だったり、添い寝カフェ、レンタル外国人、イケメン宅泣便といったものからインスピレーションを受け、そのようなパフォーマンスな取引の出現をマッピングし、コラボレーターのタイラ・ケイというアーティストがガールフレンドの世界に私たちを誘う、という作品です。こういった取引というのは日本だけではなく、実は世界中で行われています。

その消費のコレクションの中のもう一つの作品の例として、『アダルトコンテンツの警報・注意 (Warning Adult Content) 』というものがあります。これは「レンタル恋人」ということで、デジタルセックスのガイドを行います。出会い系サイトやポルノサイトでプロフィールを作って編集する「天使」としていかに仕えて生き残ることができるのか、ということを経営のオリエンテーションで説明を受けるという作品です。こういったサービスは基本的には移民の労働によって支えられていますが、オーストラリアで行う予定の『SERBISYO』では、そういったことにも焦点を当てています。

現在、来日中のフィリピンのドゥテルテ大統領が、「フィリピンの次の世代は、もうどの国にもサービスを提供しない」と発言したようです。それはつまり、フィリピンの経済が次の世代では良くなっているため、もうサービスの提供者にはならないということを意味していますが、自分がそのようなタイミングに日本にいるということもとても興味深く感じています。

(以下、質疑応答略)